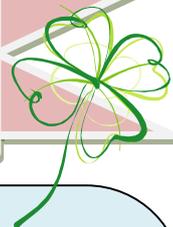


子どもの心のケアとサポートのために Vol.2

—学校・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと取り組む生徒指導—



「子どもの心の発達を支援するために」

筑波大学 人間心理学域教授
日本学校心理士会会長 石隈 利紀

2011年3月11日に起こった東日本大震災は、地震、津波、そして原子力発電所の事故により放射能の問題となりました、子どもや学校は、今なお危機的状況にあります。子どもは、震災による心の傷、親しい人やものそしてふる里の喪失、転校など学校生活の変化に対処しながら、子ども時代を生きています。

子どもは厳しい状況のなかで、学校に通い、授業や特別活動、友達や教職員との関わりを通して、自分のペースで、ゆっくりと、でも確実に発達しています。震災後、私はあらためて「学校の力」を感じております。友達と一緒に、勉強して、昼食を食べて、遊んでという日常生活を通して、子どもは回復していきます。自分の成長を自覚する機会が、授業にも、行事にも、部活動にも、たくさんあります。やはり学校は、すごいところです。

子どもの回復を支える力を「レジリエンス」（苦しい状況のなかでも健康を回復し、維持する特性や力）と言います。レジリエンスは、子ども自身の力（自助資源）の発見と活用、そして周りの力（援助資源）の発見と活用が鍵となります。子どもなりにできていること（例：朝顔をあらう、学校にきている）、工夫していること（例：友達と助け合う）を見つけ、「よくやっているね。ありがとう。すごいね。」と声をかけることが、子どもに力を与えます。そして子どもの周りの大人もよくがんばっています。先生方、職員の方々、保護者の方々、地域の方々が、お互いにお互いのできていることや工夫を認め合うことです。「ありがとう。助かります。すごいですね。」と、口に出すことで、互いの力を維持したいものです。

子どもの心の発達を支援するのは、援助する人々の「チーム」です。普段なら、子どもが状況に応じて、大人に相談します。子どもが周りの援助を活用するのです。でも今日のような厳しい状況では、援助者の方が意識的にチームを組む必要があります。学校では、生徒指導・教育相談担当、特別支援担当、養護教諭、管理職などをリーダーとする先生方が、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとともに、子どもの援助チームで取り組むことで、子どもへの良質の支援が可能になります。保護者も子どもの援助チームの重要なメンバーです。

どんな厳しい状況でも、子どもは、発達していきます。この状況が少しでもよくなることに努めながら、その間も、子どもの発達をきちんと支援していかなくてはなりません。子どもを支える大人は、当事者として「危機」を共有し、子どもの援助者として「責任」を共有し、子どもと共に生きる者として、子どもの将来と未来の社会への「希望」を共有しましょう。

🌿🌿🌿🌿 福島県子どもの心のサポートチーム協議会 🌿🌿🌿🌿

東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故の被災地であり、子どもの心の発達に対する中・長期的な支援が求められる状況にかんがみ、標記協議会を開催しました。教職員の心理・健康教育への理解、相談業務に係る技術の向上、家庭・地域との連携の在り方等を協議し、本県における児童・生徒の心のケア及びサポートの一層の充実に資する目的で、年2回行いました。

協議会は、以下の方々から構成されています。

日本学校心理士会長
日本臨床心理士会専務理事
浜松医科大学児童青年期精神医学講座教授
浜松医科大学子どもこのころの発達研究センター客員教授
福島県臨床心理士会東日本大震災プロジェクト代表
福島県臨床心理士会スクールカウンセラー委員会委員長
福島県スクールソーシャルワーカースーパーバイザー
福島県小・中・高等学校長会代表



【子どもの心のサポートチーム協議会】



平成25年3月福島県教育委員会

義務教育課ホームページ <http://www.gimu.fks.ed.jp/>



ふくしまから
はじめよう。
Future From Fukushima.

教育相談担当者 活動報告

「1年間をふりかえって」

矢吹町立矢吹小学校 教頭 近藤 祐二

平成24年度本校では、児童や保護者の心のサポート並びに学校や家庭等の課題解決のために、SCやSSWの支援を得て、教職員とチームを組んで、年間のべ約130件にのぼる教育相談を実施してきました。問題によっては、町の保健福祉課や専門機関等の協力も得て、多方面にわたる方々の助言をいただき、連携を深め、個に応じた問題や悩みにより具体的に感じられるよう、協議しながら対応することができました。

「心の分析とその支援法」

県立小野高等学校平田校 教諭 千葉茂樹

本校では、生活面や学力面で悩みを持つ生徒・保護者のために、浜松医大の巡回相談を平成24年度は2回にわたり6日間、研究者の立場から子ども達の心の分析とその支援法をご教授いただきました。SCとは違う視点で、教員にとっても有益なものとなりました。近年、セカンドオピニオンということが指摘されていますが、そういう意味でも重要かつ有益な支援事業でした。

養護教諭 保健室だより

「SCとの連携が支援の自信」

相馬市立中村第一小学校 養護教諭 横川和子

「困り感」を抱える児童に対して教育的ニーズを踏まえた上で一人一人の支援チームを組織しています。月に一度チーム会議を開いて情報を交換しあい、SCから支援の方針についての的確な助言をいただくことで、保健室でも自信を持って児童に関わることが出来ます。

平成24年度はSCによる校内研修を2回実施し支援のあり方への理解とスキルをさらに高め、学校全体で児童の成長につなげることができました。

「養護教諭とSCの連携」

福島市立福島第三中学校 養護教諭 平 朋子

SC、学級担任、養護教諭の相談体制を機能させるために、SC室を職員室と保健室の近くに配置しています。保健室登校の生徒、人間関係に悩む生徒、各々の保護者等の相談活動を円滑に推進することや、SCの指導助言を組織の中で生かす役割などを担っています。また、相談された内容を記録し、毎週行われる日常生活委員会に提案・協議し、共通理解を図り対策を講じています。

SC 実践レポート

SC：スクールカウンセラー

「校内でのチーム支援」

福島県臨床心理士会 SC横山美香

現在の勤務校では、コンサルテーションはもちろん、隔週で開かれる生徒指導委員会と不登校対策委員会で、情報を共有し支援の方針を考えています。子どもを多面的に理解し、関わりに役立つように、話し合いを重ねています。子どもの回復力を引き出し成長を促せるよう、身近に現実面を支える担任・学年の先生方、身体面をケアする養護教諭、内面を支えるSCというように、立場の違いを活かした役割分担で関わっています。

SSW 実践レポート

SSW：スクールソーシャルワーカー

「協働」

南会津町・会津教育事務所 SSW彦沢正孝

これまでは家庭、保護者への支援が大半を占め、関係機関と丁寧に対話を行いながら連携を図ってまいりました。保護者の精神保健への対応では、家族・教師やSC・町保健師・医師やSSW等との協働が奏功した一方、学校が対応に苦慮していた実態もあります。昨今の学校の過密スケジュール等を踏まえ、益々関係機関のチームワーク及びメンテナンスが重要になると実感しております。

東日本大震災以降、県外からの臨床心理士及び社会福祉士の皆様に多大なる御支援をいただいております

「助け合う心と未来を切り拓く力を育てるために」

東京臨床心理士会 SC三浦美智子

平成23年9月～10月に東京SC9名が交替で支援した小高工業高校に勤務しています。度重なる移転の末に、24年4月、原町に移転統合し、私は先生方の想いを生徒につなぐ役目を担い、生徒指導と教育相談の観点から寄宿生と転入生(30分)、1年生(20分)との全員面談を実施しました。面談票をもとに家族や生活環境、学習、進路、部活等について聴きながらエールを送っています。この組織的取組は生徒にも先生方にも好評で、次年度も継続していきます。

「子どもをまんなかにして考える」

矢吹町・県南教育事務所 SSW土屋佳子

配置2年目となり、活動の場が広がりました。家庭訪問や校内ケース会議の実施だけでなく、関係機関との連携、要保護対策地域協議会等への関与、広域的な問題への対応などにも取り組んでいます。子どもの生活環境改善に向け何をすべきか、子どもや家族の思いを踏まえた上で、関係者が集まり知恵を出し合う、そうした「チーム支援」の仕組みづくりに努めています。今後さらに先生方との協働の場を構築していきたいと思っています。

アセスメントを活用した教育相談体制について

児童生徒の精神衛生に関する調査「心のサポート」アドバイスシートの返却について

「心のサポート」シートの調査結果（「心のアドバイス」シート）は、児童生徒の調査時の心の状態を表し、「心の元気度」・「心のイライラ度」・「思いやり・優しさ（向社会的行動）」の3つの側面から総合的な所見を提示します。調査項目は、心に活力があれば、自分自身を認めながら心に余裕が持てるため、自分も他者も大切にできるという考えに基づいて作成されています。

アドバイスシートの返却に際しては、あくまで調査時の心の状態であることを踏まえた上で、所見をお読みください。また、自由記述の項目「学校生活の中でできるようになったこと・工夫したこと」を学級担任と児童生徒が共有することは、児童生徒の小さな成果や個人の工夫を賞賛することにつながり、他者から認められることが、心のエネルギーの充填につながります。

なお、心のエネルギーが枯渇している場合は、関係機関や医療機関につなぐ必要があります。調査結果が、早期発見の役割も担っておりますので、各教育事務所を通じて義務教育課にお問い合わせください。

5 チーム支援の評価

個別の支援計画で設定した長期的、短期的な支援目標の達成状況について学期末や学年末に総合的評価を行う必要があります。総合的評価から目標達成に困難が予想される場合は、再度アセスメントを行い、個別の支援計画を作成して、チームによる支援の在り方を見直します。

6 チームによる支援の終結

4 チーム支援の実践

個別の援助・支援計画に基づいてチームによる援助・支援を実施します。チームによる支援の実施段階では、コーディネーターが中心となって、定期的にケース会議を開催します。ケース会議では、メンバーの支援行為、児童生徒や保護者の反応・変化について継続・発展させ、そうでない援助・支援については廃止・改善する必要があります。会議を円滑に運営するため、支援状況を簡潔に一定の書式で記録できるシート類を作成しておくとい良いでしょう。



「心のサポート」アドバイスシート 教育相談で返却すると、3つのメリットが保たれます。

- (1) 総合所見で調査時の「心の活力（エネルギー）」と現在を比較しながら結果を受け止めることができます。
- (2) 自由記述から、児童生徒を直接賞賛したり、これからの生活に目標や見通しをもたせたりすることができます。
- (3) 支援の必要な児童生徒は、調査時のときと比較して関係機関につなぐことができます。

子どもたちと心について話題にすることで、個別の課題や問題の早期発見につながります。

3 個別の支援計画

アセスメントに基づいて、問題解決のための具体的な個別の支援計画を作成します。すなわち「何を目標に（長期目標と短期目標）、だれが（支援担当者や支援機関）、どこで（支援場所）、どのような支援を（支援内容や方法）、いつまで行うか（支援期間）」を記載した個別の支援計画については、関係する委員会、部門、学年にも周知し、共通理解を図り、連携・協力体制をつくっておきます。



1 チームによる支援の要請

深刻な問題行動や特別な支援を要する児童生徒の問題解決について、担任や保護者等から相談や要望があった場合、生徒指導委員会などの校内委員会でチームによる支援が必要か検討します。

2 アセスメントの実施

次に、関係する複数の教職員等が参加して、ケース会議を開催し、当該児童生徒に関する情報収集・分析を行い、支援の暫定的な目標や方法を検討します。これにより、暫定的にですが児童生徒のつますきの原因や背景、悩みや不安、問題の所在や程度などが明確になります。

『質問紙調査法』を活用した教育相談について

調査質問紙は専門家の協力を得て、なるべく十分に妥当性・信頼性の確かめられたものを用いると、有効性が高まります。妥当性や信頼性の高い調査の多くは、一見同じような質問内容の項目を複数回尋ねているように見える構成となっていますが、それらの複数の項目をまとめ、分析することが有効とされています。独自に作成することは専門的な訓練が必要のため、大学諸機関などの専門家と連携して質問紙を作成、実施、分析、解釈することが求められます。

結果の解釈にも注意が必要です。該当者の割合（%）、平均値と比較したときの個人（や対象クラス）の得点、1学期と比べた時の2学期の得点などのような時系列を追った変化が、各基準より数ポイント高い低いということで、結果の良し悪しを判断することはできません。質問紙調査結果には誤差が多く含まれます。児童生徒も、答えたときの気分やその日の出来事により回答が大きく揺らぎます。基準と比較したときの差に基づいて結果を解釈する場合は、その誤差の範囲を超えて割合や得点の高低の有無を検定し、解釈していく必要があります。（中略）

調査結果から何らかの問題点が見つかったときは、調査の妥当性や信頼性を再度確認した上で、他の調査結果や資料と照合させながら問題点を明らかにします。さらに、児童生徒本人や、必要に応じて保護者との面接を実施し、問題の早期発見、児童生徒理解に努めます。

（平成22年文部科学省「生徒指導提要」より）



JAMSNET メンタルヘルスネットワーク支援報告



【校内研修】

JAMSNET メンタルヘルスネットワークは、東日本大震災以降に子どもの心のケアにあたる支援者のために支援する相談窓口を開設して下さった団体です。

バーズ亀山静子先生（ニューヨーク州認定スクールサイコロジスト）、鈴木貴子先生（Ph.D. クリニカルサイコロジスト）をはじめとするJAMSNETメンタルヘルスネットワークの皆様には、これまでに、スカイプを使った電話相談以外にも、福島県に出向いていただき、直接、学校関係者を支援していただきました。主な支援内容は、「教職員へのコンサルテーション」「教室でのスキルトレーニング」「校内研修講師」「児童生徒、保護者及び教職員のための個別面談」等です。



ご挨拶

ニューヨークで活動する日米邦人医療ネットワーク(JAMSNET)の精神衛生に関わる日本人専門職グループは、子どもたちの支援者である先生方と学校をサポートしようと活動を2011年5月から開始しました。WEBサイト(<http://jamsnet.org/110.php>)を開設し、ミニ講義や対応マニュアル等の資料提供やメールや電話での相談に応じています。また2012年からは学校訪問もスタート。特別支援学校も含め幼稚園から高校までのべ21校にお邪魔しました。これは学校のご要望に応じた「出前型」支援で、教室に入ってスキルトレーニングをしたり、子どもや保護者と面談して先生方にコンサルテーションをしたり、校内職員研修の場や教員の集まりでワークショップもさせていただきました。「かえって悪化させることになったらと思うと声がかげにくい」というような具体的な悩みと一緒に考え、発達障害の子どもへの対応もコンサルテーションしています。2年経った今、支援者自身の健康問題が報告されています。いろいろな形で先生方のストレス軽減のお手伝いをしたいと願っていますのでご連絡ください。

JAMSNET ニューヨーク邦人メンタルヘルスネットワーク代表 斉藤恵真

「インクルーシブ教育」

中島村立滑津小学校長 渡邊謙一

特別支援教育を学校の核とし、児童一人一人の教育的ニーズに応え、インクルーシブ教育を推進しようと全教職員で努力しています。「一人も見捨てない」という意識は、教員として当たり前の覚悟ではありますが、教師の心のストレスへの対策が必要になると感じていました。

そんなとき、JAMSNETからの支援を受け、教職員のメンタルヘルスのための校内研修を受けることができました。フォローアップ研修もお願いし、また、二次障がいの児童へのアセスメントもいただくことができ、専門家からの助言は職場にとって何よりの力強い支援でした。



【コンサルテーション（右）バーズ先生（左）鈴木先生】

個別の支援計画をチーム支援で活用する ～「援助チームシート」について～

個別の支援計画を作成し、チーム支援の実践場面で活用するためには、児童生徒の個別の情報や学校としての援助方針を共有することが大切です。まず、子どもが困っているのは、学習状況なのか、人間関係なのか、進路に関する事なのか、健康状況なのか等、具体的な援助場面に分けて支援の計画を考えます。その上で、児童生徒への支援については、「何を、誰が、いつまで行うのか」という援助案を検討します。その際、子どもに関する情報と支援策は1枚に収まるシートが有効です。下記の援助チームシートは、筑波大学 人間系心理学域教授 日本学校心理士会長である石隈利紀先生等が開発したシートです。

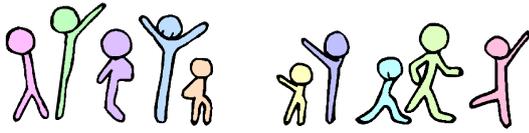
〔石隈・田村式 援助チームシート 標準版〕

実施日： 年 月 日() 時 分～ 時 分 第 回
 次回予定： 年 月 日() 時 分～ 時 分 第 回
 出席者名：

苦戦していること ()

児童生徒氏名 年 組 番 担任氏名		学習面 (学習状況) (学習スタイル) (学力) など	心理・社会面 (情緒面) (ストレス対処スタイル) (人間関係) など	進路面 (得意なことや趣味) (将来の夢や計画) (進路希望) など	健康面 (健康状況) (身体面での訴え) など
情報のまとめ	(A) いいところ 子どもの自動資源	得意なことや得意な科目、得意な科目の学習方法、学習態度	情緒のいいところ、楽しいことやワクワクすること、人との付き合い方	得意なことや趣味、将来の夢ややりたいこと、進路希望	体力や健康状況、趣味や得意なこと
	(B) 気になるところ 援助が必要なところ	成績の低下や学習の様子、苦手な科目や得意科目、学習態度	情緒の不安定なところ、気なるときの行動など、人との付き合い方	目標や希望の不明など、進路情報	心配なこと、この時期、気になる体の症状
	(C) してみたこと 今まで行った、あるいは、今行っている援助とその結果				
援助方針	(D) この時点での 目標と援助方針	この子どもにとって必要なこと、大事にしてほしいこと、配慮してほしいこと等			
援助案	(E) これからの援助 で何を行うか				
	(F) 誰が行うか				
	(G) いつから いつまで行うか				

参照：石隈利紀著 学校心理学―教師・カウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助チーム― 誠信書房 ©Ishikuma & Tamura 1997-2003
 石隈利紀・田村節子著 石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門―学校心理学 実践・実践編― 図書文化



浜松医科大学児童青年期精神医学講座 特任研究員
福島県子ども心のサポートアドバイザー 原田 新

浜松医科大学子ども心の発達研究センターは、東日本大震災以降、福島県教育委員会と連携し、福島県全域の小・中・高等学校及び特別支援学校を対象とした緊急支援活動を行ってまいりました。

平成24年度からはその事業を拡大し、福島県にスタッフを常駐させ、計延べ55校の希望校に対して(1)心の教育プログラム、(2)巡回相談(児童生徒、保護者への個人面談、先生方へのコンサルテーション)という2つの活動を実施いたしました。さらに平成25年度からは、この2つに加え、子どもの心のケアに関する保護者への講演会、ワークショップ等も本格的に実施する予定となっております。なお、本事業では福島県全域を被災地として考え、被災による心の問題に限定せず、児童生徒の幅広い問題を対象とした活動を行っております。

「心の教育プログラム」とは、児童生徒のメンタルヘルス向上を目的とした授業プログラムです。私たちはこれまで複数の授業ユニットを開発し、様々な学校で実施してまいりました。第1ユニット(一般的なストレスマネジメント方法)の概要は既に「子どもの心のケアとサポートのためにVol.1」で紹介されておりますので、第2ユニットの概要を紹介致します。

第2ユニットでは、感情のコントロール方法をテーマとし、嫌なことや心配なことを得点化する練習から始めます。得点化することで、それが自分自身で対処できるかどうかの判断が可能となります。その上で、嫌な気持ちを変える4つの方法についてワークを通して学びます。

- (1) ネガティブな考え方をポジティブな考え方に変える
- (2) 対処方法を考える
- (3) 身体の活用方法(呼吸法等)を学ぶ
- (4) 相談するための方法を学ぶ



【保護者の方々が参加した研修会】

【ワークシート1】

心の授業Unit2 ワークシート

昨年度、やったこと(Unit1)の復習

- ① いいところは、通称行動といって、(当たり前のことでも)できている、やろうとしていること、基本、自分はいくらでもできるという事実を確認しよう。
- ② 自分のほかの楽しいことや好きなことなどを感じられているときは、心が元気。感情は変えることができる。
- ③ それでも困ったときには、大人に相談してみよう。意外と、うまくいくやり方を教えてもらえるもの。

いまの調子

0 1 2 3 4 5 6

絶不調 |-----| 絶好調

この1ヶ月で楽しかったこと・うれしかったこと

メッチャ楽しい・うれしいことだけでなく、プチ楽しい・うれしいこともOK!
5つ書いたら、どのくらい楽しかった・うれしかったか、100点満点で点数をつけてみよう。書いたものの中で点数の高い順で順位をつける。

順位	この1ヶ月で楽しかったこと・うれしかったこと	点数
○		
○		
○		

【ワークシート2】

今気になる嫌なこと・心配なこと

今気になる、すごく嫌なこと・心配なことを書いてみよう。プチ嫌なこと・心配なことでもOK。3つ書いたら、どのくらい嫌か・心配か、100点満点で点数をつけてみよう。点数の高いものから順位をつけてみよう。

順位	今気になる嫌なこと・心配なこと	点数
○		
○		
○		

☆嫌なことや心配なことが頭にうかんできた時、いつもどうしてる？

- ・ どうしようもないと思ってそのままにする
- ・ 他のことを考えたり、他のことをする
- ・ 家族や友だちに話して聞いてもらう
- ・ ゲームとかやって、ストレス解消!と思う
- ・ 自分で意識して気分を変えようとする・・・など



心の教育プログラム「中学校版」第2ユニット

	学習活動・内容	時間	予想される生徒の反応	*備考 ○評価
導入	1 「うれしい」感情を想起する。 (1) 今日の調子を点数で表す。 (2) この1か月で、「楽しかったこと・うれしかったこと」を思い浮かべてプリントに書く。	5	<ul style="list-style-type: none"> • 点数をつける。 • 自分の言葉で表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> *自由に想起させる。 *どれくらい「楽しい・うれしい」のかが点数をつけることでつかみやすくなることを理解させる。
展開	2 本時の活動に見通しを持つ。 「不安」な心をコントロールする方法を身につけよう。	10	<ul style="list-style-type: none"> • 活動のねらいを聞く。 	*活動の目的を知らせる。
	3 エクササイズⅠ に参加する。 (1) 今、気になる「嫌なこと・心配なこと」を3つ思い浮かべて、点数と順位をつける。 (2) 「嫌なこと・心配なこと」が頭にうかんできた時、どうしたらよいか話し合う。 (3) 「どうせやっても無駄だ」「意味がない」「うまくいくはずない」というネガティブな発言に対して「そんなことはないよ」と思わせるポジティブな言葉を考えてみよう。		<ul style="list-style-type: none"> • 自分の言葉で表現する。 • 順位と点数をつける。 	<p>ポイント2 順位や点数をつけることで、気持ちに軽重がつけられ、解決するための優先順位が決まってきます。</p> <ul style="list-style-type: none"> *ブレンストーミングで話し合い、相手の発言は否定しないようにさせる。 *自分の言葉で表現する。
	4 心理学の概念Ⅰ について学ぶ。 (1) 「考え」と「感情」と「行動」の関係について理解する。 (2) 「感情」と「行動」を変えるのは難しいが、「考え」を変えることは比較的容易である。	10	<ul style="list-style-type: none"> • 相手のネガティブな発言をポジティブな発言で受け止める。 	*自分の言葉で表現する。
	5 エクササイズⅡ に参加する。 (1) 「嫌なこと・心配なこと」があるときどうするか、具体的な「対処方法」(何とかうまくやる方法)を話し合う。 ① 「高校入試が心配で勉強が手につかない。」 ② 「高校生活や将来のことが心配で、やる気になれない。」 ③ 「親に叱られて腹が立つ。」 ④ 「友達と気まずくなっている。」 (2) 一番説得力のある発言を紹介する。	10	<p>ポイント3 相手の気持ちを受け止めて、勇気づける言葉に変換してあげるよう例示します。(例)「うまくいくはずがない」 →「やらないで後悔するより、やって後悔する方がよい。」</p> <ul style="list-style-type: none"> • ワークシートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> *3つとも連動することを理解させる。 ○不安という「感情」が出てきて、自分がコントロールできなくなって、勉強が手につかないという「行動」になる仕組みを理解することができたか。(観察) *1分30秒ほど話し合い、1番説得力のある意見をグループ内で決定する。 *時間を計って繰り返す。
6 心理学の概念Ⅱ について学ぶ。 ① 考え方を変えると気持ちも変わる。 ② 問題の解決のなかで、やれることをやることは大事である。自分で対処が難しい場合は、気分の問題として対処法を相談する。 ③ 嫌なことがいくつかある時は、「点数の低いもの」から片付ける。	10	<p>ポイント4 グループ代表の発表を全体でシェアリングすることで、対処方法の幅が広がります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「感情」も「行動」も変えることは難しいが、「考え」を変えることは比較的容易であることに気づくことができたか。 		
終末	7 ストレス解消方法(セルフケア)を学ぶ。 身体を活用する方法「息を吐く、ストレッチ等」(リラクゼーション)を知る。	5	<p>ポイント5 点数化された課題は、一番気になるものから片付けようとするのではなく、一番点数の低いものから片付けると、達成感が味わえて次の大きな課題に立ち向かうことができるようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 全員で練習する。 	*大人に相談してみるの、予想以上に効果があることを伝える。



「子どもの心のサポート」のために

教育相談体制の構築のために

学校には、学級担任・ホームルーム担任を始め、教育相談担当教員、養護教諭、生徒指導主事、スクールカウンセラーなど様々な立場の教員がいます。校長、教頭は管理職ならではの指導・支援ができません。専科教員や授業担当者、部活動の顧問は、日常の観察やきめ細かいかわりが可能です。最近ではスクールソーシャルワーカーといった外部人材（非常勤職員）も配置され始め、社会福祉的な視点からの見立てや支援も可能になりました。このように、学校には一人の児童生徒をめぐる様々な教員が多様なかわりを持つことができ、特にその児童生徒の良いところを認め励ますことによって児童生徒を支えていくことができることが特徴であり、大きな利点といえます。

（平成22年文部科学省「生徒指導提要」より）

援助資源が豊富な学校は、チームで教育相談体制を構築することが可能です。この他、学校は、早期発見・早期対応が可能であり、関係機関と連携が取りやすい特質があります。

校内における教育相談体制の構築については、日頃から学校が一体となって取り組むことができるように整備しておかなければなりません。そのためには、教育相談に対する教員一人一人の意識を高めていくことが重要であり、児童生徒の抱える悩みを早期に発見し、悩みが深刻化しないように解決に向けての助言や声かけを組織的に行う体制を構築することが大切です。

例えば、客観的な情報を把握するために行う「いじめについてのアンケート」等は、教員がいじめを許さない、いじめを見逃さない、そして、一人一人の児童生徒をいじめから守る、という強い姿勢を伝える意思表示の機会になります。また、その集計結果をもとに、どのような校風を創り上げていくのかを学校全体で考える機会をもつことにもつながります。

これからの教育相談は、家庭や地域の協力、各方面の専門家や専門機関との連携だけでなく、特別支援教育などと連動して児童生徒の個別のニーズに即応できること等、多様化する児童生徒の問題に、教職員がチームとして問題の解決にあたることが求められています。

「安心できる学校づくりをめざして」

川俣高等学校 教諭 鈴木裕子

本校では、多くの生徒が避難先から通学しています。そのため、個別指導がより有効になるよう、各学年でストレスマネジメント教室を開催し、安心して学べる環境づくりに取り組んでおります。平成24年度は、浜松医科大学子ども心のサポートアドバイザーによる「こころの授業」を行い、全職員で多方面から指導する体制を整えております。また、家庭状況が生徒の心や学校生活に大きく影響することから、SCによるメンタルヘルス、教職員集団による支援、SSWによる家庭生活支援の3者による重なりが望まれております。

教育相談担当者・SSW・SCの声

「チーム会議の取組」

福島大学教授 福島県SSWスーパーバイザー
鈴木庸裕

スクールソーシャルワーカーは、社会福祉の専門的な知識や技術をもとに、学校でのケース会議を通じて、児童生徒本人や本人を取り巻く環境（家族や学校、関係機関）に働きかけます。教育委員会や学校に配置され、教職員と協働して、長期欠席やネグレクト、いじめ、非行、校内暴力や発達障害などに起因する問題の軽減をめざします。近年、市町村の要保護児童対策地域協議会（虐待防止ネットワーク）などとの連携が増えています。

「SCと教育・医療・保健福祉との連携を通して」

福島県臨床心理士会SC委員会委員長
下田章子

子どもは周囲のさまざまな人とのつながりの中で発達をしていきます。震災では子どもを育む地域のつながりも大きな影響を受けました。子どもの心のサポートのためには学校内だけでなく、学校外の教育や医療、保健福祉など、地域の社会資源を活かしていくことが大切だと感じています。SCとしてもSSWとも協力して教職員や保護者、学校外との連携を行って取り組んでいます。また、震災後は県外の臨床心理士などからも多くのサポートをいただいています。

【参 考】

- 『子どもの心のケアのために—PTSDの理解とその予防—』文部科学省（保護者用リーフレット）
http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/kokoro/06041905/001.pdf
- 『子どもの心のケアのために—災害や事件・事故発生時を中心に—』平成22年7月 文部科学省
http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/1297484.htm